デカルトにおける「枚挙」について
――『規則論』規則Ⅶの検討――

倉田　隆

I

『規則論[1]』の規則Ⅶは，その大部分が「枚挙（enumeratio）」の説明に充てられている。その中でデカルトは，「枚挙」の重要性について次のように述べている。「或る認識が単純な直観（intuitus）へと還元され得ない場合はいつでも，……我々が全信頼を寄せるべきものとしては，唯一この途〔枚挙〕しか残っていないのである」（389.11－14）。しかし他方，『規則論』の随所で言われているように，我々が知識（scientia）を獲得する為の最も確実な途は，直観と演繹（deductio）の二つだけなのである。[2]「枚挙」と演繹とは同じものなのか，或いは「枚挙」は，直観と演繹に加えられる第三の途なのか。それとも，ここでデカルトの『規則論』の不整合を指摘するだけで満足すべきなのか。

この問については，実はデカルト自身が，規則Ⅺの中で，一つの解答を与えている。少し長くなるが引用してみよう。

> 演繹は，……それを遂行するということに関して考察するならば，その全体が同時になされるとは思われず，或るものを他のものから推論する我々の精神の或る種の運動を含んでいる。……しかし，既になされたものとしての演繹に注目するならば，その場合は，演繹は，もはや何ら運動を示さず，かえって運動の結末を示しているのである。それ故に我々は，演繹が単純で明瞭な時，それは直観によって見てとられるとするのであるが，しかし，演繹が多様で錯綜している時はそうではない。そのような演繹には，枚挙或いは帰納（inductio）という名を我々は与えたのである（407.18－408.6）。

この解答を見る限り，確かに「枚挙」は演繹の一種である。従って，J. シュヴァリエは，「枚挙それ自体は一種の演繹に他ならず，即ちそれは，多様で錯綜した演繹（déduction multiple et enveloppée）である[3]」と言う。しかし，上に述べた疑問がすべて氷解したわけではない。むしろ一層複雑になったように思われる。即ち，「枚挙」とは，演繹の過程そのものなのか，それとも，演繹が実現した後の，いわば検証の手続なのか，という問題が生ずる

のである。更に，「枚挙」が「帰納」と言い換えられている以上，推論の方向としては，一見したところ，正反対だと思われる演繹と帰納とが，同一のものと看做されているのだろうか，という疑問も生ずる。

これらの問に完全に答える為には，この「枚挙」の操作が具体的に用いられている箇所(4)を，デカルトの全著作に渉って詳細に検討するのが最も堅実なやり方であろうが，それはここでは断念せざるを得ない。しかし，デカルトの全著作のうちで，「枚挙」そのものについて最も詳しい説明を与えているのが，『規則論』の規則Ⅶである。しかも，J.P. ヴェベールによれば，規則Ⅶは，全く異質な二つの手続，即ち，探究の手続（procédé de recherche）と検証の手続（procédé de contrôle）とに同じ「枚挙」という名称を与えているという。(5) それ故，小論では，この規則Ⅶを注意深く読むことによって，上述の問に答えるべく「枚挙」の意味を確定することを目指したい。

Ⅱ

規則Ⅶは，第7規則と，それを敷衍した10段落の文章からなる。これらを順を逐って吟味していきたい。まず，第7規則であるが，それは次のような規則である。

> 知識を完成させるためには，我々の目的に関連する事柄をすべて一つ一つ，連続的で，どこにも中断されていない，思惟の運動によって，調べ上げ（perlustrare），またそれらを，充分な順序だてられた枚挙によって総括（complecti）しなければならない（387.10—13）。

この規則を見る限り，「連続的で，どこにも中断されていない，思惟の運動によって，調べ上げる」ことと，「充分な順序だてられた枚挙によって総括する」こととの関係は不明瞭である。全く別のことであるとする方が自然かもしれない。(6) しかし，多くの解釈者は，両方とも「枚挙」の操作によるものとしている。例えば，R. ユベールやÉ. ジルソンは，はっきりとこの箇所を指摘しながら，「枚挙」が，連続的で，どこにも中断がなく，充分で，順序だてられたものでなければならない，と述べている。(7) もしそうであるとすると，「枚挙」と，先に述べたように，やはり思惟の運動によって遂行される演繹とは，一貫した思惟の運動の異なる局面と言えるかもしれない。しかし，このような「枚挙」が，演繹が一旦終った後の検証の手続であるのか，演繹の過程そのもののことであるのか，或いは演繹と関連はしながらも，手続としては全く別のものであるのか，この第7規則そのものだけから断定することは出来ない。

次の第1・第2段落は，主に，第7規則の前半部分，即ち，「連続的で，どこにも中断されていない，思惟の運動によって，調べ上げ」ることの説明に充てられている。この段落を検討することによって，条件付きではあるが，「枚挙」の役割の一つを挙げることが出来るであろ

う。以下に，その全文を引用しよう。

ここで示されたことの遵守は，それ自身によって知られる第一原理から直接には演繹されないと上で述べたあの諸々の真理を，確実なものとして認めるために，必要なのである。実際，この演繹は，しばしば実に長い推論の連鎖によってなされるので，我々がそれらの真理に辿りついた時，我々をそこまで導いてきた全行程を容易には思い出せないほどなのである。だから，思惟の一種の連続的な運動によって，記憶の弱さを補うべきである，と言うのである。従って，例えば，様々な操作によって，まずAとBという量の間には如何なる関係があるか，次にBとCとの間，更にCとDとの間，そして最後にDとEとの間には如何なる関係があるかを，私が知ったとしよう。しかしだからといって私は，AとEとの間の関係が如何なるものであるかを知らないし，また，すべての関係を記憶していない限り，既に知られている関係によってそれを正確に認識することも出来ないのである。それ故，個々のものを直観し，同時に他のものに移って行く思惟[8]の一種の連続的な運動によって，私はそれらの関係を何度も通覧し（percurrere），遂には，最初のものから最後のものまで，記憶の役割を殆ど残すことなく事柄全体を同時に直観すると思える程迅速に，移ることが出来るようになるだろう。実際，このようにして記憶の負担が軽減されると，精神の遅鈍もまた矯正され，かつその能力も或る意味で拡大されるのである。

ところで我々は，この運動がどこにも中断されていてはならない，ということを付加える。何故ならば，あまりに急いで遠く離れた諸原理から何らかのものを演繹しようとする人々は，中間の結論のすべての連鎖を，多くの事柄を軽率に看過しない程に正確に一々辿る，ということをしないことがしばしばあるからである。そして確かに，何かごく僅かなことですら，それが見落される場合は，直ちに連鎖は破られて，結論の確実さは全て消え去るのである（387.14－388.17）。

ここでは，「枚挙」という語は一度も現れてこない。しかし，「連続的でどこにも中断されていない思惟の運動によって通覧する」ことを「枚挙」の操作の一つと看做し得るならば，「枚挙」は次のようなものになる。即ち，その役割は，既になされた演繹の長い連鎖を，どれ一つ見落すことなく辿り直すことであり，また，何度もそれを繰り返すことによって，演繹の全体を直観に還元することである。B. ギブソンが，「枚挙の第一の形態は，継起的に次々に演繹されている事柄の系列を素速く全体に渉って見直す（rapid general review）ことである[9]」と述べているのは，この箇所を根拠にしている。また，É. ブレイエが，「枚挙は，直観の及ぶ範囲を増大するための実践的手続（procédé pratique）である[10]」としているのも同様である。このような「枚挙」は，明らかに，検証の手続としての枚挙であろう。

しかし更に，この「連続的でどこにも中断されていない運動」が，「個々のものを直観し，同時に他のものに移って行く」思惟の運動であるならば，「枚挙」は，演繹の過程そのものと，少くとも形式的には同じものであろう。何故ならば，本稿でも先に少し触れたが，演繹も，「個々のものを明瞭に直観する思惟の，連続的でどこにも中断されていない運動によって」（369.24－26）なされるものであり，検証はそれの繰り返しだからである。従って，演繹を行い，その後それを検証するという，一連の過程を「枚挙」と看做すことも可能であろう。逆に言えば，「枚挙」は，検証という操作の加わった特殊な演繹である，と言うことが出来るだろう。この場合，単純な命題から始めて複雑な命題の真の認識に至るという「綜合」――この語は『規則論』では一度も使われていないが――の過程の大部分を「枚挙」が占めることになるだろう。更にA. アヌカンは，「枚挙或いは精神の連続的な運動（énumération ou un mouvement continu de l'esprit）」と言って，両者を同一視することによって，「枚挙は判断である[11]」という結論を引出している。この場合の運動は演繹及びその検証だけを指しているのだろうか。つまり，「枚挙」の役割はもっと広範囲に及ぶのではないか。実際，次の第3・第4段落で，更に新たな役割が登場する。この段落も全文を引用しよう。

この規則において，更に我々は，枚挙が必要なのは知識を完成するためである，と言う。何故なら，他の諸規則は確かに多くの問題を解くのに役立つけれども，以下のようにすることが出来るのは，ただ枚挙の助けによってのみだからである。即ち，如何なる問題にも心を向け，その問題に常に正しく確実な判断を与え，それ故更に，何物も我々から全く逃れるということはなく，我々はすべてのものについて何かを知っているように思われる，というようにすることが出来るのは，枚挙の助けによってのみだからである。

従って，この枚挙，換言すれば帰納は，提示された何らかの問題に関係するあらゆる事柄についての，それによって我々が如何なるものも誤って見落したことはなかったと確実に明証的に結論することが出来る程，注意深く正確な探究なのである。それ故，これを用いる度ごとに，たとえ求められているものが我々に知られずにいようとも，少なくとも我々によって知られている如何なる途によってもそれは見出され得なかったと我々は確実に認める，という点において，我々はより賢明になるのである。また，しばしば起ることであるが，もし偶然に，我々が求めるものに至るために人間に許されているあらゆる途を調べ上げることができたとするならば，それの認識は人間精神のすべての把握力を超えていると，大胆に語り得るであろう（388.18－389.7）。

ここでようやく「枚挙」という語が本文中に現れるが，もし第1・第2段落において述べられたような操作を「枚挙」と呼ぶことが出来るならば，ここでの「枚挙」はそれとは全く異る

ものである。或いは少くとも，検証の手続としての「枚挙」とは別物である。つまり，検証の手続としての「枚挙」は，与えられた問題について演繹がなされた後で，その中間の結論の連鎖に見落しがないかを確認するものであった。しかし，ここで述べられているような，「何物も我々から全く逃れるということはなく，我々はすべてのものについて何かを知っている」ようにする「枚挙」が，果して検証の手続であろうか。検証の手続ならば，ごく僅かなものでも我々から逃れてはならないはずである。このことは遂行中の演繹についても言えることである。従って，「我々から全く逃れてしまうようなことはない」のは，既になされた演繹の連鎖でも，遂行中の演繹の連鎖でもなくて，我々が心を向ける問題についての知識のことである。つまり，「枚挙」によって我々は，すべての事柄について何らかのことを知ることが出来る，と言われているのであって，ここでは「枚挙」は，問題を解く場面に関わってくるのである。このことは，上に引用した第4段落冒頭の「枚挙」の定義を見れば，更に明らかである。

「枚挙」とは，「提示された何らかの問題に関係するあらゆる事柄についての，それによって我々が如何なるものも誤って見落したことはなかったと確実に明証的に結論することができる程，注意深く正確な探究なのである。」極めて曖昧な定義ではあるが，しかしこれだけでも，ここで言われている「枚挙」が，検証の手続としての「枚挙」，或いは綜合の過程における「枚挙」とは，別のものであることがわかる。というのも，ここで言われている「枚挙」は，むしろ，問題を解決するにあたって必要なデータを収集し，それらを一つ一つ注意深く正確に吟味すること，だと思われるからである。この点を重視すれば，L. リアールのように，「枚挙は単なる検証の手続ではない(12)」と言わなければならない。これは，L. J.ベックの言うように，「予備的探査（preliminary survey）(13)」としての「枚挙」であろう。

更に，「これ〔枚挙〕を用いる度ごとに，たとえ求められているものが我々に知られずにいようとも，少なくとも我々によって知られている如何なる途によってもそれは見出され得なかったと我々は確実に認める」のであるならば，「枚挙」とは，問題を解く途そのもの，しかも唯一の途であることになろう。デカルトが，「枚挙」と「帰納」とを同一視する理由を，ここに見ることが出来るかもしれない。デカルトにとって帰納とは，与えられた複雑な問題に関係のあるすべてのデータを集め，或いはデータを得るためにその問題を分割し，その中から必要なものをすべて拾い上げ，更にそれらを最も単純なものへと還元すること，即ち「分析」――この言葉も『規則論』では使われていない――という一つの全体的過程のことだ，と思われるからである。

この点については，後に再び触れることにするが，ともかく，この第3・第4段落における「枚挙」は，第1・第2段落におけるそれとは異なる役割を果すものである。後者は，検証の

手続であり，或いはそれに演繹の過程そのものを付加するならば，綜合の手続と呼んでもよいであろう。それに対して前者は，ベックの言葉を借りるならば，予備的探査の手続である。このように異なる役割を果す二つの操作を，共に「枚挙」と呼ぶことが出来るのだろうか。ヴェヴールのように，どちらをも「枚挙」としながらも，全く異質なものとして，第1・第2段落と第3・第4段落とでは，書かれた時期も別である，とすべきであろうか。それとも，第1・第2段落における手続に関しては，デカルトが一言も「枚挙」と言っていない以上，これを「枚挙」と呼ぶべきではないのだろうか。或いは，二つとも「枚挙」と呼び得るだけの根拠があるのだろうか。

第5・第6段落において，この疑問の一部は解決されるように思われる。先に第6段落の以下の箇所を検討しよう。

> 私は，この操作〔枚挙〕が充分でなければならない，と言った。というのも，しばしばこの操作が不備なことがあり，その結果，誤ることになりかねないからである。実際，時には，極めて明証的な多くのものを，確かに枚挙によって調べ上げるとしても，ほんの僅かなものにせよ，もし我々がそれを見逃すならば，連鎖は破れ，結論の全確実性は消え去ることになるのである（389.26－390.2）。

この箇所は第2段落に酷似している。しかもここでははっきりと「枚挙によって調べ上げる」と述べられている。従って，先程提出した疑問点について，一つの解答を得ることが出来るだろう。即ち，「連続的でどこにも中断されていない思惟の運動」は，それを「枚挙」と同一視できるか否かはさておき，「枚挙」の重要な要素であり，このような運動によって推論の連鎖を通覧することは「枚挙」の一つの役割である，と言ってもよいのではないだろうか。従って，「枚挙」を検証ないし綜合の手続と看做す時に今まで付随していた保留，「第1，第2段落における操作を枚挙と呼ぶことができるならば」という保留を，ここで撤去することが出来るだろう。検証ないし綜合の手続は，やはり「枚挙」の重要な役割の一つとみてよい。

さて第5段落であるが，ここで更に新しい役割が「枚挙」に付加わるように思われる。次の文に注目したい。

> 我々が多くの別々のものから何か唯一つのものを推論するような場合には，我々の知性の能力はしばしば，それらすべてのものを唯一つの直観によって総括できる程に大きくはないのである。この場合には，この枚挙の操作の確実さが，知性にとって充分であるとしなければならない（389.17－20）。

ここでの「枚挙」の役割は，既になされた推論の過程全体を，唯一つの直観に還元すべく，繰り返し検証することである，と看做すことも確かに出来るだろう。実際，ユベールやヴェ

ベールはそのように解している（Huber. op. cit., p.503. Weber. op. cit., pp.51-2）。

しかしこの箇所で，それとは全く別の役割を見ることも可能である。即ち，「多くの別々のものから何か唯一つのものを推論する場合には」という箇所に注目して，「枚挙」とは，このような推論そのものを指すと解するのである。ギブソンはこの箇所を根拠にして，「枚挙」の機能の一つとして，「分離した諸事実の集合から，或いは数多くのばらばらな諸命題から，引き出される推論」（op. cit., p.153）を挙げている。そうすると，この場合の「推論」とは如何なるものなのであろうか。今迄述べてきた「演繹」とは別なものであるように思われる。或る単純な命題から出発して複雑な問題の理解に至る途が演繹だとするならば，ここで述べられている「推論」は，それとは逆方向ではないであろうか。つまり，「多くの別々のもの」というのは，複雑な問題を解くにあたって集められたデータ，或いはデータとなるべく分割されたその問題の諸部分，のことであり，「何か唯一つのもの」というのは，演繹の出発点となるべき単純な命題のことではないであろうか。もしそうだとすると，この「推論」は，先に第3・第4段落を検討した際に述べたような，分析の過程のことであろう。従って「枚挙」は，予備的探査及び単純な命題への還元という二つの役割を担うことになる。これを分析の手続と呼ぼう。この手続きが具体的に如何なるものであるかを，次の第7段落の検討によって明らかにしたい。

第7段落では，次の三つの例が挙げられている。それらを引用しよう。

例えば私が，枚挙によって，存在者の類のいくつが物体的であるか，即ち，何らかの仕方で感覚によって捉えられるか，を証明しようと欲する時，自分ですべてのものを枚挙によって総括し，一つ一つを相互に区別した，ということを第一に確実に知った上でなければ，その数はこれこれで，それよりも多くはない，と断言することはないだろう。しかしながら，同じ枚挙の途によって，理性的魂は物体的ではない，ということを示そうと欲する時は，枚挙は完全である必要はなく，すべての物体を一緒にいくつかの集合に総括して，これらの集合のどれにも理性的魂が関係し得ないことを論証すれば，それで充分であろう。最後に，その周囲が等しい他の如何なる図形の面積よりも円の面積が大きい，ということを枚挙によって示そうと欲する時は，すべての図形を吟味する必要はなく，そのことを特に或るいくつかの図形について論証して，ただ同じことを他のすべての図形について，帰納によって結論すれば，それで充分なのである（390.9－24）。

ここで挙げられた三つの例は，すべて分析の手続としての「枚挙」の例である。第一の例の場合，問題に関係のあるすべての事柄を収集し相互に区別するという，予備的探査でもって，論証の殆どは終っていると言ってよいが，その枚挙すべき事柄の数は厖大なものとなろう。デ

カルトが「枚挙」の効用を認めているのは，明らかに，第二，第三の例の場合である。ここでは，「枚挙」の最も重要な役割は，問題に関係するすべての事柄を分類することであろう。分類原理は勿論直観によって見出されなくてはならないであろうが，一度それが見出されたならば，問題に関係するすべての事柄をいくつかのクラスに分け，各々のクラスの代表を調べ吟味することが，「枚挙」の果す役割となるであろう。

しかも，このようなクラス分けによって，より単純なものへの還元の方向も指し示される。何故ならば，各クラスの代表をまた更にクラス分けするという作業の繰り返しが，とりもなおさず，還元への途だからである。第8・第9段落は，再び例を挙げて，こうした順序だてられた「枚挙」の重要性を強調してるが，特にここに引用する必要はないであろう。

予備的探査としての「枚挙」が，単純な命題への還元作用を伴いながら，分析の手続を構成し得るのは，このクラス分けの作業によってなのである。それ故ユベールは，このクラス分けこそが「枚挙」の最も重要な役割である，と言う（op. cit., p.507）。分析の手続としての「枚挙」は，具体的には，次のような手続きになる。即ち，まず与えられた問題に関係するデータを集め，それらをクラス分けすることによって，より単純なものへと遡る，という手続である。

以上検討してきたように，「枚挙」は，大きく分けて二つの役割，即ち，綜合の手続と分析の手続という役割を担うものである。この二つの手続は，確かにそれ自体としてみれば，別々のものである。しかし，デカルトの「枚挙」は，この二つの役割を共に担い得るものとして提出されているのではないだろうか。このことを，最終段落の検討によって確認したい。それを，先に提出された問，即ち，全く異質の二つの操作に同じ「枚挙」という名を与える根拠はあるのか，という問の一つの解答にしたい。

Ⅲ

最終段落で注目すべきは，その前半部分である。以下に引用しよう。

なお，上のこれら三つの規則〔第5，第6，第7規則〕は分離すべきではない。というのは，大抵の場合これらは同時に考えられるべきであり，これらすべてが等しく協力することによって，方法が完全になるからである（392.1－4）。

第5規則，第6規則は，次のような規則である。

第5規則：方法の全体は，何らかの真理を発見するために，精神の眼差しがそこへと向けられるべき事柄の，順序と配置とに存する。そして，錯綜した不明瞭な命題を，より単純な

命題へと段階を追って還元し，しかる後，すべてのうちで最も単純な命題の直観から他のすべての命題の認識へと，同じ諸段階を経て登ろうと試みるならば，我々は正確に方法に従うことになるであろう（379.15－21）。

第6規則：最も単純な事柄を，錯綜した事柄から区別し，順序だてて探究するためには，我々がそこにおいて或る若干の真理を他の諸真理から直接に演繹したところの，事柄の系列各々において，何が最も単純であり，如何にして他のすべてのものは，この最も単純なものから，より多く，或いはより少なく，或いは等しく隔たっているのかということを，観察しなければならない（381.2－6）。

さて，規則Ⅵの本文中に，「全く選ぶところなく，自ずから明らかなる真理を集め」（384.12－13）という文がある。これこそが，分析の手続としての「枚挙」がまず最初になすべきことであろう。次に，第6規則で言われている，「如何にして他のすべてのものは，この最も単純なものから，より多く，或いはより少なく，或いは等しく隔たっているかということを観察する」というのは，順序だてられた「枚挙」が行うクラス分けのことではないだろうか。更に，第5規則の「錯綜した不明瞭な命題を，より単純な命題へと段落を追って還元し」というのは，分析の手続としての「枚挙」が，単純な命題への還元作用，即ち，いわゆる帰納的推論をも含意するとするならば，やはり「枚挙」の役割と考えられる。そして，「すべてのうちで最も単純な命題の直観から他のすべての命題の認識へと，同じ諸段階を経て登ろうと試みる」というのは，狭い意味での演繹的推論であるが，「同じ諸段階を経て」という点を重視するならば，それは本質的には帰納的推論の繰り返しであろう。ここに，分析の手続と綜合の手続とが，両方とも「枚挙」と呼ばれ得る根拠があるのではないだろうか。即ち，実際に困難な問題に直面した時に，我々が施す単純な命題への還元作業を，そのまま逆に辿りながら，見落しのないことを確認しつつその問題について判断を下すことは，分析の手続としての「枚挙」の途を逆方向に辿り直すことであり，それは綜合の手続に他ならないからである。

第5，第6，第7の三つの規則が「同時に考えられるべきであり，それらすべてが等しく協力することによって方法が完全になる」のであれば，この分析と綜合の手続を，一つの全体的過程として辿ることが，デカルトの方法に従うことになるだろう。従って，「枚挙」は，デカルトの方法の実に広い範囲を覆うものである。『規則論』における「枚挙」の様々な操作が，一見したところ全く別々な操作であるかのように見えるのは，デカルトが，このように広い範囲に渉る役割を「枚挙」に担わせたところから由来する。小論では，「枚挙」を分析と綜合という観点から整理することによって，「枚挙」のもつ様々な操作相互の連関を或る程度明らかにすることが出来たと思われる。

註

(1) *Regulae ad directionem ingenii*

『規則論』のテキストは，*Oeuvres de Descartes* Tome X, publiée par C. Adam & P. Tannery を使用した。文中で，例えば392.1－4と略記したのは，この全集版第10巻，392ページ，1行目から4行目を意味する。傍点は筆者によるものである。

(2) 直観と演繹については，拙稿を参照されたい。

『デカルトにおける「直観」と「演繹」』関西哲学会紀要第20冊所収

(3) J. Chevalier, *Descartes*, Plon, 1921, p.186.

(4) 例えば，『気象学』第8講，『屈折光学』第7講，『哲学原理』第4部，『情念論』第2部等。

(5) J. P. Weber, *La constitution du texte Regulae*, Société d'édition d'enseignement supérieur, 1964, pp.48-57.

(6) c.f. J. P. Weber, op. cit., p.57. A. Baillet, *La vie de Monsieur Descartes*, Horthemels, 1691, Tome II, p.405.

(7) c.f. R. Hubert, "La théorie cartésienne de l'énumeration", *Revue de Metaphysique et de Morale* 1916. p.510. É. Gilson, *Commentaire du Discours de la Methode*, Vrin, 1925, p.213.

(8) J. L. マリオンに従って，テキストではimaginationisとあるところを，cogitationisと訂正して読む。

c.f. J. L. Marion, *Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit et la recherche de la vérité*, Nijhoff, 1977, pp.182-3, note 3.

(9) B. Gibson, "The Regulae of Descartes", *Mind*, 1898, p.151.

(10) É. Bréhier, *Histoire de la philosophie*, Alcan, 1929, Tome II-1, p.62.

(11) A. Hannequin, *Études d'histoire des sciences et d'histoire de la philosophie*, Alcan, 1908, vol. I, p.229.

(12) L. Liard, *Descartes*, Baillière, 1882, p.27.

(13) L. J. Beck, *The method of Descartes*, Oxford Clarendon Press,1952, p.143.

"*Enumeratio* chez Descartes"
—— Étude sur "*Regulae*" *regula* VII ——

Takashi Kurata

Dans la méthode cartésienne, *enumeratio* occupe la place importante. Mais il n'est pas trés évident quelle opération elle est sous une forme concrète. En effet, il y a beaucoup de interprètes qui présentent des diverses interpretations. Je voudrais décider le sens de *enumeratio* par une examen de *regula* VII.

D'abord, *enumeratio* est la vérification de la déduction déjà faite. Elle peut comporter ce procédé de déduction lui-même, car la déduction et son vérification sont faites par le même mouvement de pensée. Il est donc possible d'appeler la grande partie du processus de synthèse *enumeratio.* De plus, *enumeratio* a un autre rôle. C'est de recueillir tous les data qui ont des relation avec le problème complexe. Par là, on peut le réduire à la proposition simple. Ce processus de reduction est une induction dans le sens étroit, et présuppose *enumeratio.* Alors, *enumeratio sive inductio* peut signifier ce processus d'analyse. Encore plus, la deduction est de suivre ce processus contrairement. Donc, la plupart de tout le processus d'analyse et synthèse peut s'appeler *enumeratio.* Reciproquement, si on prend *enumeratio* comme recuillement des data pour l'induction dans le sens étroit, pour ainsi dire, la préparation de la déduction analytique, la plupart de tout le processus d'analyse et synthèse peut s'appeler la déduction. L'ambiguïté qui entoure *enumeratio* chez Descartes serait presque exclue au point de cette vue.